

2013年10月4日(金)

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746

NEWS	
緊張するシリア情勢.....	P.1~2
次なる一手、感染予防.....	P.3~4
~現地報告~ シリア難民支援.....	P.5
絆ぐるぐるツアーを終えて.....	P.6
伊達市富成地区の現状とこれからの課題.....	P.7
鎌田代表のつぶやき.....	P.8上
CD『青い空白い鳩』ができました! チヨコ募金お披露目会のお知らせ..	P.8下

緊張する シリア情勢

2011年から始まったシリア国内の混乱より、近隣諸国に逃れて難民となつた人々は200万人を超えた(2013年9月3日現在)。毎日平均約5千人が国外に逃れる状況が続いています。JIM-NETが活動している北イラクでも8月15日から2週間の間だけで5万人の難民がなだれ込むという異常事態が発生し、毎日1000人を超える難民が出続けています。クルド自治政府のキャバを超てしまい、アルビル市内には都市難民が急増し、路上生活や物乞いをしているシリア難民が多く見受けられます。また、アメリカはシリア政府が化学兵器を使用したと断定し、武力行使に踏み切ろうとしており、さらなる惨事も予測されます。9月1日、予定を変更して急きょ榎本職員をアルビルに派遣し新たな支援体制で臨むことになりました(支援活動の様子についてはP.5ご参照)。

●アメリカのシリア攻撃に反対する

私たちは、アメリカのシリア攻撃に強く反対しています。理由は、攻撃しても内戦終結するとは思えず、
1) アメリカの介入は、攻撃そのもので犠牲になる人たちがいること。

2) 新たな紛争のプレーヤーを増やすことになり、市民の犠牲が増え、内戦が一層激しくなる。



3) 化学兵器が、アサド政権が使用したのではなかつたら懲罰にはならず、反体制派やテロ組織が外部から持ち込んだ可能性もあり、化学兵器がさらに拡散され使用され続けることになる。

2003年、日本政府は、対米関係という理由で、アメリカのいい加減な情報を精査することなくイラク戦争を支持しました。JIM-NETもかかわってきた「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」では、イラク戦争の教訓に学び、「米欧の対シリア武力介入に反対し、日本政府に停戦に向けて全力を尽くすことを求める」声明をだし、電子署名を行っています。詳しくは以下のHPをご覧ください。

<http://iraqwar-inquiry.net/?p=678841174>

日本の対シリア政策は、早い時期から4本の柱を立てています。(1)人道支援、(2)アサド政権への圧力強化、(3)シリア反体制派への支援、(4)ポスト・アサドを見据えた復興準備支援、がそれですが、反体制派支援を全面に打ち出しており、ポスト・アサドといつてもイラクと同じように破綻国家となり、テロの温床となりかねない状況であることを考えると方針転換が必要です。昨年の暮れには、外務省とNGOのODA政策協議会の席で、「シリア紛争に関して、難民支援も重

要であるが、紛争を停止させるために、政府、NGOが一体となって、尽力すべきである。わが国は、長年シリアへのODA供与や技術協力をやってきた。したがってアサド政権とのパイプも深いと考えられる。和平交渉の場づくりに関して、そういうたびに利用するべき。反体制派への武器供与といった支援の仕方では、犠牲者が増えるばかりである。」と意見させていただきました。

しかし、先日のG20では、日米中心で11か国がだした共同声明は、「8月21日にダマスカスの郊外でおきた化学兵器の攻撃を最も強い言葉で非難する。証拠は明らかにこの攻撃が、政権による化学兵器の射撃分布図の一部であり、シリア政府に責任があることを示している。—中略— 合衆国その他の国々の化学兵器の使用禁止の強化のための取組を支持する」としています。

NHKの日曜討論で菅官房長官は、司会に、アサド政権が化学兵器を使用したと断定していることに関して聞かれ「日本としての情報収集のほか、アメリカに従来より踏み込んだ情報提供を求めた結果、総合的に可能性が高いとみて声明を支持した」と質問に答えていました。一体どのような情報を日本が提供されたのか。国民にも示すべきだと思います。やはり、アメリカには、イラク戦争の前科があるので信じろといわれても難しいのも現実。

9月9日、面白いことが起きました。アメリカのケリー国務長官は、記者会見で、攻撃を避ける方法はないのかと聞かれ「シリアが化学兵器を国際社会に引き渡したら（やるわけないでしょう）攻撃を回避する」と半ば冗談で記者会見で答えたのをロシアのラブロフ外相は、「シリアの化学兵器を国際管理下に置くことによって攻撃が回避できるのであれば、われわれは直ちにシリア政府と共に問題に取り組んでいく」と逆手に取ったのです。シリアを化学兵器禁止条約に加盟させるという話も浮上。シリアのムアレム外相は、「ロシアの提案を歓迎する」と述べており、ロシアとシリアが化学兵器を国際管理下に置くためにどうするか具体的なプラン作りにはいりました。これで、アメリカもすぐには武力行使が出来なくなりました。

● クルドの戦争

一方、シリア国内では、紛争の激化が続いています。我々が活動の拠点としている北イラクですが、クルド系シリア難民が大量に発生しています。シリアでは、クルド人は、2級市民の扱いを受け、国籍すらない人もいます。アラブの春の影響をうけ、彼らの権利を主張するデモなども起きました。反体制派が、自由シリア軍や、トルコが支援するムスリム同胞団、イスラム原理主義のテロ組織などを中心に戦闘を展開して

いく過程で、アサド政権崩壊後も、民族的にも、宗教的にもクルド人の権利が守られる保証はなく、戦闘は難しくなってきます。

今まで北シリアでは、アサド政権側とクルド、自由シリア軍が支配地域をわけ、均衡が保たれており治安はさほど悪くはありませんでした。しかし、電気がない、仕事もない、生活物資も不足し、生活がやっていけないということで、北イラクへ仕事を求めて避難する人が多かったです。しかし、ヌスラ戦線が8月に入ってから、クルド人への迫害を強めるようになり、命からがら国境を目指す人が増えました。

クルド自治政府は、隣国シリアのクルド人を守るために、あらゆる手段をとると警告していますが、クルド自治政府だけでは空爆も難しく、工作員を送り込みこんで情報収集という段階のようです。シリアのクルド市民を守るためにには国境を開いて大量の難民を保護し、支援することが第一に必要です。しかし、同時にテログループが紛れ込んでいることも考えられ、国境の警備を怠ると、北イラクも戦火に巻きこまれてしまいます。また難民支援にも限界があり、ヨルダンに比べ、北イラクで活動する国際NGOの数は、圧倒的に少ないので現状です。

●私たちにできること

残念ながらシリア問題への関心は低く、寄付もなかなか集まらないのが実情です。その一方で日本政府は80億円の支援をシリアを行っています。これらが有効に使われるため、私たちも協力を続けたいと思っています。たとえば、ジャパン・プラットフォームなどの政府資金を北イラクに投入すべく、山形県のNGO、IVYに情報提供やロジ面での協力をしています。クルドの現地NGOが草の根の人間の安全保障といった日本政府の支援が得られるようにつないだりすることや、メディアなどに現地の情報を伝えて、日本国内で関心が高まるような努力も続けています。

JIM-NETの活動としては、引き続き募金を集めて、これら大きな支援の枠に入らない人たちや、得意とする医療分野での妊産婦支援と、シリアから逃げてきた小児がんの子どもたちの支援を、現地のナナカリービー病院と一緒にやっています。大きな団子を結ぶ串のような役割を担っていきたいと思っています。



難民キャンプの子どもたちと佐藤事務局長

次なる一手、感染予防

井下俊（JIM-NET医師）

●10年ぶりのバグダッド

JIM-NETは2004年設立である。この10年の活動が実を結んでいるか確認するため、今年6月にバグダッドを訪問した。私は戦争直後の2003年6月にバグダッドを訪れており、ちょうど10年ぶりのバグダッドであった。結論から言うと、10年でバグダッドの政治状況にさほどの変化はなく、それゆえJIM-NETの活動も実を結んでいるとは言えない。

JIM-NETが事務所を構えるイラク北部（クルド自治区）は治安上の問題は皆無であるが、バグダッドではまだまだ不安定である。バグダッドで医師たちとのカンファレンス中、三尺玉の大花火を間近で感じるのと同じような衝撃が響いた。私は瞬間に顔が青ざめ胸がどきどきしたのであるが、イラク医師たちは何事もなく「いつものことさ」といった面持ちでカンファレンスを進めていた。後で確認すると、数百メートル離れたチェックポイントで自動車爆弾テロがあり、数人が死亡したことであった。治安上の混乱はまだ続いている、イラク政府はそれを十分にコントロールできていない。

小児がん医療の進歩には「我が国的小児がんの子供たちを救う！」といった強い意志が不可欠だ。しっかりした戦略を立て、存分に予算をつぎ込む国家的取組がなければ小児がん医療は進歩しない。現在のイラクは自分が生き残るのに必死であり、がんに侵された子どもを救おうという余裕はない。長期計画の欠如のためにイラク小児がん医療の現場は混乱したままであり、JIM-NETの活動が実を結んでいるとはいえない現状であった。

●命を助けるための活動

JIM-NETの活動目標は、「イラク小児がん患者が医療を受けられ命が助かるようにする」ことである。戦後すぐの2004年からその目標を掲げ活動してきた。もちろんその目標は変わっていないのだが、具体的に何をすべきかはイラクの政治状況とともに変化している。

戦争終了直後イラク国内は混乱を極め、患者は治安の悪さのため通院できず、相当数のイラクの小児がん患者が周辺国で治療を受けていた。JIM-NETはそのような患者たちの支援を微力ながら行った。その後2007年くらいまで、イラク国内の薬品市場や政府による医薬品の配給システムは崩壊したままで、イラク国内で満足な治療が行えない状況が続いていた。それでもイラク国内に留まざるを得ない患者たちがおり、その治療を行っている医師たちがいたため、JIM-NETは海外から薬剤や医療器具を現地の医師に

直接届けてきた。

戦争後10年が経過した現在、イラク国内の薬品市場は回復しバグダッドで大部分の薬剤は入手できるようになった。イラク政府は不安定だが、少なくとも保健省からの薬剤供給は戦争直後よりは充実している。にもかかわらず、2009年以降イラクの小児がん治療成績は向上していない。むしろ悪化している（前号参照）。根本的原因は、前述の国家的取組の欠如により病院機能が向上していないのが主因である。しかし、そこに文句をつけるばかりで立ち止まっていては何も始まらない。JIM-NETの名が廃る。現時点で何ができるのか、何がJIM-NETにできる命を助ける方策であるか、考え続けなければならない。

●現在の課題

戦争直後は品薄であった抗癌剤はおおむね入手可能となり、不完全な治療で終わる症例は稀となった。しかし、副作用のきつい抗癌剤ばかりが充実しても治療成績は改善しない。抗癌剤による種々の合併症、中でも感染症を克服するための方策がなければ患者を失うのみとなる。今のイラクがそうである。2009年以降の治療成績悪化は、抗がん剤の充実により感染対策の不備があぶりだされた結果である。

JIM-NETの活動初期、抗癌剤のみイラクに送り患者を死なせることを危惧していたため、感染症を克服するための資材や抗生物質も配給してきた。加えて、感染予防に関する看護師研修を行い、JIM-NET会議で繰り返し感染予防の重要性をイラク人医師たちに訴えてきた。しかしイラクで感染対策は全くと言っていいほどできていない。病院あげての感染予防活動の確立が緊急の課題であるのだが、これがなかなか難しい。

●困難な感染予防対策

感染予防に特別な技術は必要ない。突き詰めれば手を洗いましょう、拭き掃除をせっせとしましょうという単純なことであるのだが、イラクでは難しい。なぜだろうか？

1) 気候習慣の違い

イラクは乾燥した国で砂嵐が頻回に生じる。コンクリートで覆われた都市部でも、いったん砂嵐に見舞われると砂だらけになり、少し外出するだけで衣服は埃っぽくなる。イスラム教では女性の肌の露出に関して厳しく、母親世代の女性たちはおおむね真黒な布を頭からすっぽりと被り外出する。病院であってもそれを脱ぐことはなく、粉塵が大敵の小児がん病棟でも母親たちはその衣服のまま付き添っている。

2) 看護業務の違い

患者ベッド周囲の清掃・患者の清拭・口腔内の清浄・おむつ交換・吐物処理・リネン交換など、感染予防で重要な項目の多くが日本では看護業務に含まれる。しかしイラクでは違う。ほぼすべて患者家族の仕事である。傷のガーゼ交換さえも患者家族の仕事だ。これらの作業をイラクの看護師が責任もって行えば、感染対策は劇的に改善するのだが、これが難しい。

時に異性の体に触れなければならない看護師の仕事はイスラム社会では敬遠され、社会的地位は低い。そのためプロ意識は保持しがたい。感染対策の重要性を認識していても積極的に実践することではなく、患者と密に接し汚物にも触れなければならない看護業務は受け入れられず、患者家族に任せられたままである。

3) 乏しいチーム感覚

感染対策というものは、一人の医師や看護師あるいは最新式の機器があれば達成できるものではない。清掃員や給食をも含んだ病院全体での継続した取り組みが必要である。イラクではそのシステム作りがむづかしい。私の偏見かもしれないが、長年紛争や圧政に苛

まれていたためだろうか、イラクの人たちは所属する組織が強い団結力をもつことに恐れを抱いているようを感じる。感染予防活動に不可欠な、病院全体で患者の命を守るという意識が乏しい。各部門バラバラに行動し、全体での活動は困難である。

また格差社会ゆえ、医師や薬剤師などの特権意識もチーム形成に支障をきたしている。なにか問題が生じると、社会的地位が低い看護師や患者家族に責任を押し付け、特権階級の自分たちに落ち度はないという態度をとる傾向がみられる。これでは病院全体で団結して感染予防に取り組むことはできない。

●人材求む！

というわけで、「イラク小児がん患者の命が助かるようにする」ためには感染対策の活性化が必要であるのだが、なかなか困難な仕事である。資金や人材の面でも往々している。とくに、イラクの感染対策活動を定期的にチェックし、的確な助言ができる人材・組織が必要だ。誰かいい人いないかな。
鶴 鶴 鶴 鶴 鶴

イラクとサッカー

JIM-NET事務局長 佐藤真紀

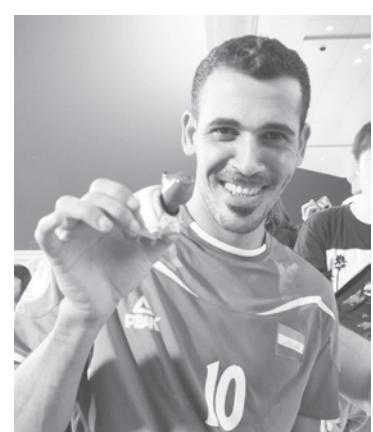
2013年6月11日のワールドカップアジア予選のイラクV S 日本戦はカタールのドーハが会場だった。なんと偶然にも、井下、佐藤の帰りのチケットはドーハ経由。ローカルスタッフのイラク人イブラヒムはサッカーが大好きなので、一緒に連れて行こうとしたが、カタールがイラク人にはビザを出さないという。なぜそもそもカタールかというとイラクの治安。F I F Aはイラク国内での国際試合を禁止している。ワールドカップの予選はホームとアウェイで開催されるが、自国で試合ができないイラクは不利。アルビルはとても治安がいいのだから、ここでやればと訴えてきた。アルビルのスタジアムに視察に行くと誰もいないのでピッチに入ってきた。ゴールエリアに羊の糞らしきものが散乱している。想像するに、ベドウィンのおっさんが羊を入れて芝を食わしていたのだろう！これは川嶋選手、いやだろうな。治安対策だけでなく羊対策が必要だ。

さて、僕と井下はドーハに。スタジアムに到着すると、日本人サポーターの数が圧倒的に多くイラク側は本当に少ないのだ。イブラヒムがくれたイラクのユニホームを着て応援。隣には、イラクの選手がいて、

「ホンダはでるのか？」「ナガトモのコーヒーに睡眠薬でも入れてくれないかな」とか、そんな冗談を交わす。イラクは、果敢に攻めるも岡崎にやられ、0-1で敗退してしまった。日本の選手たちは、その後、ブ

ラジルに飛びコンフェデ杯に参戦。しかし、ブラジルでは、「ワールドカップに金を使うなら、貧困や福祉対策に！」と街中ではデモが毎日繰り広げられた。トルコでもオリンピック誘致に無駄金をつかうなどデモが相次いでいる。おりしもトルコで、U 20（20歳以下）のワールドカップが開催。イラクは、イングランドや、韓国といった強豪を負かし準決勝まで勝ち進んだ。最後はウルグアイにPK戦で敗れベスト4で終わるが、イラク戦争の時に10歳だった子どもたちが、ピッチで堂々と世界を相手に戦ったのだ！純粋にスポーツを楽しめ、トルコでも反対運動はおこらなかつた。

2020年のオリンピックは東京に決定。「（放射能は）全く問題はありません」と自信たっぷりに言い放った安倍総理。純粋なスポーツを超えたぎらぎらとした日本が見え隠れする。



ユニス・マフムード選手。
キャプテンとして2007年のアジアカップではイラクを優勝に導くなど夢を与え続けたが、この試合を最後に引退。JIM-NETから感謝の特性アカペコを贈呈され、笑顔を見てくれた。

～現地報告～ シリア難民支援

榎本彰子（海外プロジェクト担当）

今年の夏は日本でも暑い日が続きましたが、こちらイラクでも毎日50度近くまで気温が上がり、アルビルに逃れてきている難民は過酷な状況下に置かれています。そんなアルビルから支援活動をご報告致します。

●妊産婦支援

アルビルに逃れてきているシリア難民妊産婦は、病院やヘルスセンターに行けず、母体や新生児の健康に関する情報が得にくい現状です。そうした妊産婦が安全に赤ちゃんを出産できるよう定期的な検診の受診を支援しています。検診にかかる費用・薬代・交通費を補助し、日本から専門家を派遣し家庭訪問による問診や聞き取り調査を実施しました。さらに、検査記録をはじめ妊婦の健康状況やアドバイス、出産時の大切な事項、出産後の予防接種や成長状況等が書かれたアラビア語版の母子手帳を配りました。また産後のサポートとして、おむつ・粉ミルクなども配布しました。

ヨルダン（アンマン）では、シリアのNGOが行う産婦人科での出産費用を補助しました。実施期間中（2013年1月～3月）、231人分の出産費の半額を支援しました。またイラク同様、妊娠中と出産後に家庭訪問をして問診と聞き取り調査を実施し、産後のサポートとして、おむつ・粉ミルクを配布しました。

結果として多くの妊産婦が定期的・継続的な検診を受けることができ、医療施設での出産により安全なお産に繋がりました。かつて第一子を亡くされた妊婦さんは出産に不安を感じていましたが、定期的な検診を受け医師に相談することで、赤ちゃんの状態を把握し安心できたと話していました。また母子手帳の情報によって、第一子の時と違うことが起きたときも、慌てず状況を理解できたと言います。出産後の今も、細かなことを相談する相手が周りにいないので、手帳に書かれた育児情報を読んで参考にしているとのことでした。



妊産婦検診を受ける女性

●衣類配布（紛ぐるぐるプロジェクト）

難民の多くは着の身着のままで逃れた人が多く、大半の人は所持品をほとんど持たずに避難してきています。そこで震災後に石巻に寄せられ残っていた衣類をシリア難民に届けました。主に、支援があまり受けられないキャンプの外に避難している都市難民に配布しました。ヨルダンでは、都市難民の多い東アンマン地域や、シリアとの国境近くにあるマフラックで配りました。これまでに約1820枚の衣類を配布しました。

イラクでは、アルビル郊外のバハルカやダラトゥ地域に住む都市難民に計470枚ほどの衣類を配布しました。もらった衣類をすぐに袋から出し、試着してみる子どもたちの顔からは笑みがこぼれています。

●その他の支援

イラクとヨルダンで約100世帯に生活必需品の物資支援を行いました。アルビルに逃れている都市難民の中には、家賃も払えず路上生活をする難民もいます。不安定な環境下で、夫を内戦で亡くし4人の子ども達を育てている女性もいました。アルビル郊外の街の空き地に、布や絨毯で囲った手製のテントで寝泊まりしています。彼女の家庭にも、粉ミルク・おむつ・食糧を届けました。また、一緒に逃ってきた義父が心臓病のため薬の支援もしました。物資を受け取り喜びながらも、この先の生活を案じていました。そのため女性の生業支援も企画しています。イスラム教のラマダン時期、数家庭に羊を配りました。その羊の毛を刈って羊毛手工芸品を作成してみました。今後はそれを生業に繋げていきたいと思います。



路上生活の難民への物資配布

【現地最新事情】

8月15日の国境一時開放時から、北イラクには内戦の激化やアメリカの軍事介入の恐れにより、多くの難民が流入してきています。15日以降に逃れてきた難民の数は、5万人以上とされています。以前より計画されていたアルビル郊外のダラシャクランキャンプに加え、新たなキャンプが新設されました。その中の一つ、バハルカ地域にある新キャンプを9月上旬に訪問しました。このキャンプには、9月4日時点で4000人ほどの難民が滞在しています。食糧の配給量が不十分なことと、米・パン・豆・油などが主な配布内容であるため、追加の食糧やミルクなどのニーズが挙がってきました。また所持品をほとんど持たずに逃れてきているので、衣料品が求められています。そのため

JIM-NETは、新たに逃れてきたシリア難民に対しても緊急物資支援や妊産婦支援を実施していく予定です。



カワルゴスクキャンプでの聞き取り調査(写真右 榎本)

絆ぐるぐるツアーを終えて

大嶋愛（国内イベント担当）

バグダッドからスハッドさん・ハディールさん姉妹を招き2週間日本を旅した「絆ぐるぐるツアー」は、怒涛のスケジュールで観光をする暇もほとんどありませんでしたが、日本の子どもたち・若者たちと交流できしたこと、そして被爆地・被災地を訪れたことは、姉妹にとって大きな経験となったようです。福島で大学生と交流し日本の感想を聞かれた際、「長崎がダメージを受けたあとに、こんなにきれいな街に復興したなんて素晴らしいと思った。福島や石巻の人たちも、こんなに笑顔で、こんなに普通に暮らしていると思わなかつた。日本人は優しい上に強い」と感想を述べていました。

今回のツアーは、子どもたちの人懐っこさに驚きました。外国人は敬遠されるかなと思ったのですが、すぐに姉妹と仲良くなってくれました。大人は斜に構えてしまうけれど子どもはすごいですね！姉妹がとても楽しそうに遊んでいるのが印象的でした。イラク戦争が始まった時小学生だった二人は、福島・石巻を訪れた際に当時の自分と重ね合わせ、戦争と震災という違いはあるけれども、同じような境遇に心を痛めています。しかし、子どもたちの元気に二人ともパワーをもらつたようでした。福島・石巻の小学校訪問や講演会では、現地の方たちが温かく迎えてくださいました。なかなかJIM-NETの海外・国内のプロジェクトの双方をつなげることは難しいのですが、現地の方たちがイラクに想いを寄せてくださっていることがわかり、とても嬉しかったです。まさに『絆ぐるぐる』を感じることができました。

●今回実施したツアーデイ程●

8月19日	成田	日本到着
8月20日	東京	東京芸大卒の弦楽アンサンブルTGSとりハーサル
8月21日	長崎	童話館の「祈りの丘絵本美術館」で交流会 核廃絶を目指す「高校生一万人署名」に参加
8月22日	松本	福島の子どもたちの保養キャンプ(JCF主催)に合流
8月23日	松本	子どもサミットin信州に参加 (鎌田代表と阿部長野県知事のトークの後に演奏) サイトウキネンフェスティバルのオペラにご招待いただき鑑賞
8月24日	東京	アラブレストラン「月の砂漠」でディナーショー
8月25日	東京	トーク＆コンサート(プロのミュージシャン4組も友情参加)
8月26日	東京	イラク大使館を表敬訪問
8月27日	大阪	トーク＆ミニライブ 同年代アイドル藤波心さん、大学生アーティスト浦田沙緒音さん参加
8月28日		大阪→宮城へ移動
8月29日	宮城	石巻市立北上小学校の4年生と交流 バグダッドで姉妹が参加した東日本大震災チャリティー コンサートの寄付金が送られた相川小(統廃合により 現在は北上小に通学)の子どもたちと対面
8月30日	福島	(昼)伊達市立富成小学校の全校生徒と交流 (夜)二本松市の真行寺でトーク＆ミニライブ
8月31日	福島	ふくしまNGO協働スペースで交流会後、帰国の途

スハッドさんたち家族とは、イラク戦争直前にJIM-NET事務局長が出会い、それからずっと続くご縁です。お父さんが音楽学校の住み込みの用務員だったこともあり、5人兄弟みんなが楽器を演奏します。日本人スタッフを置くアルビルのナナカリ病院にも慰問演奏に来てくださいました。イラク戦争から10年を機に、今回、二人を日本に呼ぶこととなりました。

シャイな二人はあまり多くを語りません。しかし、つらいことはたくさんあったけれどそれを乗り越えて来た強さをところどころに感じます。松本の保養キャンプで一緒だった福島のお母様に「ずっと戦争してる国だから、ちょっとスレてる部分あるんじゃないかなと思ってた。捻くれずに、よくこんなに純朴に育つたよね」と言ってくださいました。

10年前小さな子どもだった二人が、凛とした姿の素敵な女性になって日本に来てくれたことに感謝です。シリア騒乱の影響もあり、イラク国内でテロが増えて、バグダッドの治安も心配です。二人がこれからも大学生活を謳歌し、無事に健やかに過ごせますように！

招聘カンパや応援のメッセージをくださった皆さま、各地でご協力くださった皆さまに、この場を借りて、心よりお礼申し上げます。



松本で小澤征爾さんと



東京ピーストーク
&
コンサート



富成小歓迎会



伊達市富成地区の現状とこれからの課題

村田信一 (JIM-NET 福島プロジェクト担当)

7月から福島に入った。

私は昨年9月から今年の3月末まで、福島県伊達市の富成地区に住み、地域振興の仕事をしていた。福島では、一昨年3月の原子力発電所の事故により、広範囲で放射線が高線量で検出されていることは知っていたが、実際に暮らしてみると、その影響は想像以上だった。しかし、地域振興の仕事では、出来る事にも限界があると感じていた。

初夏になってから、以前からの友人でもあったJIM-NETの佐藤さんと話した。その時に、JIM-NETがすでに伊達市で活動していることを知り、富成でも是非活動して欲しいと話したことから、JIM-NETの活動に関わらせてもらうことになった。

久しぶりに帰ってきた富成は、初夏の陽気の中で濃い緑に覆われて、一年でも最高の季節を迎つつあった。さまざまな花々が咲き誇り、名産でもある桃がたわわに実り、人々の表情も、心なしか明るくなってきたようにも感じられた。知己の地域の人たちと話すと、概ね地域の除染も終わったとのことで、これで線量が下がって農産物の出荷が出来て、食べられるようになればいいけどなあ、と切実に語っていた。地域内に設置されている線量を表示しているモニタリングポストでチェックしてみると、確かに以前よりは線量が下がっているようだ。とはいっても依然高い数値であることには変わりない上に、子どもたちの通学路などは思うように線量が下がっていないようだった。

富成で、JIM-NETとして何をやっていけばいいのか。それを探るために、7月下旬にリサーチを行った。主に、小学生の子どもを持つ親に話を聞き、どんなこ

とが心配なのか。ど

んなことをやりたい、

あるいはやって欲しいのか。その辺を確認するためだった。

結果としては、どの親も多かれ少なかれ子どもたちのことを心配していて（当然といえば、当然だが）線量が下がったとはいっても、果たして健康に与える影響がどうなのか不安がつていたし、野菜や米などからも基準以

上の放射性物質が検出されることが少なくなっているとはいえ、多くの親が子どもたちには県外産を食べさせていることも改めて確認できた。この結果から、私としては、食に関わる事業が最優先だろうと考える。長期的には低線量地域への移動も考えていく必要がある。

8月になると、外を歩いている人も心なしか増えてきているように感じられた。そして、以前は見られなかつた、子どもたちが自転車をこいでいる姿を見ることもあった。単に季節柄なのか、あるいは除染が進んで線量が多少下がったからなのかはわからないが、原発の爆発事故から2年半が過ぎ、住民の間でももう大丈夫だろうという思いも拡がってきてはあるのかもしれない。いずれにしても、子どもたちは外で遊ぶのが当たり前でもあり、そういう点からも子どもたちの健康を第一に考えた施策を実現していくことが重要だろうと改めて思った。

富成は、豊かな自然に包まれた、素晴らしい土地である。各種野菜や果物も豊富に産出され、震災前には過疎化こそ進んでいたとはいえ、その環境の良さと都市部へのアクセスの良さから、移り住んでくる人も少なくなかったのだ。しかし原発事故の影響は大きく、伊達市でもとくに放射能に汚染された地域となってしまった。ここに暮らす人々をいかに救えるのか、いや少しでも安心してもらえるのか。そういうことに、微力ながら貢献したいと思う。なによりも、子どもたちの未来のために、地域の将来のために、人々が健康に生きていけることのきっかけを作りたい。



富成の風景

鎌田代表のつぶやき。。。

～○に近い△を探す～

スハッドとハディールの姉妹が来日した折には、たくさんの方々にお世話になりました。特に被災地の方々には、心からのおもてなしをしていただきました。東北の方々の優しさに心から感謝します。イラク戦争が行なわれて10年になります。当時10歳だったスハッドは、二十歳の女性になりました。イラクの子どもや若者たちにとって、イラク戦争がなんだったのかがよくわかりました。戦争は彼女たちの未来をずいぶん潰してきました。今まさにシリアでアメリカが空爆を仕掛けようとしていますが、ぼくは武力行使反対と思っています。戦争をした結果、いいことは起きていません。毒ガスが使用されたことに関しては許せない行為ですが、さらに戦争を広げることは大きな禍根を残します。それはイラク戦争で学んだはずです。

最近、『○に近い△を生きる—「正論」や「正解」にだまされるな』というタイトルの本をポプラ新書から発刊しました。シリアのアサド政権による強圧的な政治を許すか許さないか、○と×がヒステリックに飛び交いますが、シリアの一般民衆にとっての○に近い△を探すことが大切です。毒ガスは許せない、という正論はもちろん、もっとも大事です。しかし、シリアの子どもや女性たちの命をどう守るか、とても大きな問題です。JIM-NETの事務所があるイラク北部のアルビル近郊にも4箇所のシリアの難

民キャンプができ始めています。多くは女性と子どもです。JIM-NETは妊産婦や子どもたちの命を守ろうと、必死で動き出しています。本当の平和がくるまで、○に近い△を探すことを、JIM-NETは続けていきたいと思います。

福島の支援も行なっています。この支援も本当に難しいです。子どもをつれて福島を出た人、いろいろな事情のなかで、福島に残らざるを得ない小さな子どもをもった若いお母さん。どっちがいいか、という○か×かだけではなく、福島を出たお母さんや子どもたちの支援もしながら、残らざるを得なかつた子どもたちに少しでも健康被害が起きないように、放射能の見える化や保養、検診の充実を訴え続けていこうと思っています。これからもJIM-NETの活動に温かなご支援をよろしくお願ひ致します。



写真左より、リカア先生、鎌田代表、スハッドさん、ハディールさん
(長野県松本市にて)

CD『青い空白い鳩』ができました！

青い空 白い鳩

イラクの白血病の子どもたちからのメッセージを伝えたい、といろいろな人が立ち上がり、チャリティーアイベントのテーマソング『青い空白い鳩』のCDができました。

優しいメロディーと歌声が平和な気持してくれます。戦争と平和、子どもたちの犠牲について、思いを馳せて聞いていただけたら幸いです。

1. 青い空白い鳩

(オーボエ：スハッド・サード)

2. Amazing Grace

3. 青い空白い鳩

1枚1,000円 + 送料80円

購入ご希望の方はメールまたはお電話にてお申込みください。

♥チョコ募金お披露目会のお知らせ♥

毎年12月に開始するチョコ募金。今年のメッセージとデザインを発表する会を以下の通り開きます。鎌田實代表もご挨拶申し上げますので、皆さま万事お繕り合せの上、ぜひお越しください。

日時：11月30日（土）18:30～

場所：スペースたんぽぽ（水道橋）

定員：80名（申込先着順）

会費：1,000円（チョコ募金1缶分含む）

参加ご希望の方はメールまたはお電話にてお申込みください。スタッフ一同、心よりお待ちしております。

JIM-NET便り 2013年 10月号

発行：特定非営利活動法人

日本イラク医療支援ネットワーク

発行日：2013年10月4日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303

info-jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746